

団塊世代

生き残り

戦略

Kumamoto Hideki
熊本秀樹

文芸社

『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

団塊世代

生き残り

戦略

熊本秀樹

Kumamoto Hideki

文芸社



はじめに

私は昭和二三年（一九四八年）に生まれた典型的な団塊世代である。気がついてみれば、五〇歳なかばを過ぎている。考えたくはないが、もうすぐ気楽で無責任な現役サラリーマンを辞めさせられ、そのあとは、ただのじいさんだ。

しかし、ただのじいさんで気楽に暮らしていけるのならいいが、いやでも経験しなければならぬ日本の高齢社会と、その対策をなにも打ち出せない政府やお役所の無責任感覚を考えると、恐怖と絶望で夜も寝られないほど不安なのだ。

年金や医療保険、それに介護保険制度に守られた、比較的恵まれている現在の老人たちにしても、けっして幸せな老後を送っているようには思えない。

私の両親も妻の両親も八〇歳を超して生活しているが、家族だけで年老いた親を支えることはできない。ヘルパーさんを頼み、老人ホームのショートステイもフルに利用しているのだが、親も子もギリギリのところまで追いつめられている。そして、不自由な生活を

強いられている多くの老人が公共の老人介護施設に列をなして待っている。私たちの親も受け入れ施設がなくて在宅介護を長く続けた。

介護保険により負担が軽減されたとはいえ、老人を抱えた家族の精神的・肉体的な苦勞は想像を絶するほど厳しい状態であり、家庭が崩壊する危機を常にはらんでいる。

かつて福祉国家の見本とはやされた、あのスウェーデンでさえ、生活は保障されても老人の暮らしは孤独でさびしく、ただ、生かされているだけの悲惨さがあつたと聞く。

日本の場合はスウェーデンどころではない。政府の借金が際限なく膨らんでいるし、少子高齢化で労働人口は減る一方なのだ。これは、将来の日本経済が必ずや機能不全を起す確たる根拠でもある。

政府や行政の福祉対策に期待する時代は終わった。私たちには、自分の力で老後の生活を支えていくしか道は残されていない。

頭数が多いがために入学試験で競争し、社会に出れば出世競争に体力を消耗してきた私たち世代の競争は死ぬまで続く。

そんなに悲觀的にならなくても、そこそこの生活ができればいい、夫婦が仲良く老後を食べていけるだけで十分だと思っている人は、まちがいなく後悔することになる。夫婦で

ゆっくり暮らすどころか、あした食べるご飯さえ手に入れることができなくなる。

ほとんどの人は、将来の不安をどう解消できるのか考えていない。いざとなればどうにかなると思っっている。特にお金のことになると、先の見通しどころか、現在の生活費が赤字なのか黒字なのか、貯金がいくらあるのかさえ知らないのんきな人が多い。

弱肉強食の本当の戦いはこれから始まる。みんなと同じようにやっていけばなんとかなるだろう、と適当に妥協する道は残されていない。

はつきりしていることは、これからの老後に「ほどほどに」とか「世間並みに」という言葉は通用しないということだ。今までのように金持ちでもないが貧乏でもない中流感覚の人たちに生き残る道は残されていない。

団塊世代は目の前に迫った老後という激流に立ち向かわなければならぬ。経済音痴の私がファイナンシャル・プランナーの資格をとったのも、老後の戦略を立てるためだ。

これは、国の財政状況や国際的な経済の動向に興味を持ち、銀行や証券会社を訪ねて貯蓄や投資の知識を吸収し、老人ホームの説明会や実際に施設の見学に出かけるきっかけもなった。

現在の老人が抱える問題を直視することにより、私たちが抱えている将来の漠然とした不安とはいったい何なのか、その正体をはっきり見極め、老後の覚悟とそれに必要なお金を守る戦略を今すぐ考えておかなければ、想像もできない悲惨な将来が私たちを待ち受けている。

熊本 秀樹

目次

はじめに 3

第一章 恐怖の老後がやってくる 17

団塊世代は老後を生き延びることができるのか 18

絶望の老後 18

老人ホームにさえ入れてもらえない 19

生き残れるのは自給自足できる者だけ 20

これからの日本は今までの穏やかな社会ではない 21

私たちは知らないうちに数千万円の借金を背負っている 22

世界の歴史にも例がない異常事態 25

お役所は頼りにならない 27

若い人たちの不満が治安の悪化をまねく 29

長生きをすればするほど悲惨な生活が待っている 30

老後の面倒を見てくれるのは私たちの子供ではない 31

子供を甘くみるな 31

親の面倒を見てくれる子供は四人に一人 33

老人病院の恐怖 35

CIAの報告 36

大勢の外国人がやってくる 37

第二章 こんなサラリーマンに明日はない 41

世の中から取り残される人間像 42

悪いことはすべて人のせいにする無責任体質 42

自分の考えを持たないオジサンやオバサン 43

家族と付き合えない会社人間 44

家族思いの濡れ落ち葉 46

亭主と旅行に行きたがらない妻 47

年金が頼りの気楽な人たち 52

給料から天引きされているのは、私たちの年金ではない 52

国や企業が年金の責任から逃げ出そうとしている 53

余裕のない生活をしている人ほど銀行と郵便局しか知らない 56

国が保証しているからこそ危ない郵便貯金 58

食い荒らされる郵便貯金 59

あつという間に一文なし 61

地獄のシナリオはできている 62

リスクを取れない人たち 62

会社での仕事や実績は役に立たない 65

膨らむ国の借金 66

間に合わない対策 68

切り捨てられる公共サービス 70

恐怖の借金取りがやってくる 72

第三章 老後の武器はお金 73

とにかくお金がかかる老後の生活 74

老人介護は体力とお金の勝負 74

在宅介護で年間なんと一〇〇〇万円超 76

いくらお金が必要なのかわかる 77

資金計画の目標を大きく持つ 80

資産運用の第一歩を踏み出す 82

資産運用の準備 82

お金を確実に増やす極意 85

習うより慣れろ 87

金利を知る 89

投資を知る 91

一番確実な投資先はこれだ 91

投資と博打を混同するな 92

ただ分散投資してもリスクは減らない 96

投資をむずかしく考えるな 97

わからないものに手を出すな 98

お金を預けるときにチェック 101

使える金融機関と金融商品 103

郵便局に行ってみる 103

郵便局の金融商品 105

郵便局はせいぜい財布代わりにしか使えない 106

銀行に行ってみる 109

銀行の金融商品 110

証券会社に行ってみる 114

意外に知られていない証券会社の金融商品 115

投資信託を株式市場から直接買う 118

いつでも現金にできる一〇〇万円以下の不動産投資 120

外貨に投資するなら、これ 122

インフレに備えて金を買う 124

もう目の前に来たインフレの脅威 127

インフレ対策抜きの資産運用に老後はない 127

もっともリスクの高い郵便貯金や銀行の定期預金 128

第四章 老後を生きる覚悟 131

財産を残すと子供を不幸にする 132

少しばかりの家や土地が争いの種になる 132

あなたの財産を狙っているのは子供たちだけではない 133

自分のお金を使い切って死ぬ 134

遺言書を書く 136

遺言で愛する人への責任を果たす 138

老人ホームを選ぶ 140

公共の老人ホーム 140

有料老人ホーム 141

高級老人ホームがいいとは限らない 143

絶対やってはいけないこと 145

借金の返済に退職金を当てにしないこと 145

子供に電話をしないこと 146

奥さんや子供の生活に干渉しないこと 147

女の人と絶対に喧嘩をしないこと 148

老後を受け入れる準備と覚悟 149

ボケなんか怖くない 149

積極的な社会参加がボケを防止する 151

老後も人脈が必要 152

成年後見制度を利用する 154

第五章 団塊世代の生き残り戦略 157

老後の資金はいくら必要かを知る 158

最低限度の生活費はいくら必要か 158

ゆとりのある生活をするにはいくら必要か 160

二〇〇〇万円で老後を乗り切る 162

老後の資金が六六歳で底をつく 162

死ぬまで働くつもりでも七七歳から自転車操業 165

二〇〇〇万円ですべて老後を乗り切るにはこれしかない 168

六〇歳退職の時、貯金が二〇〇〇万円ない人はどうするか 171

豊かな老後を望むなら定年後も仕事人間に徹する 172

インフレに備える 175

激しいインフレにもあわててお金の準備はしない 175

老後の資金をインフレから守る 176

タンス預金が身を守る 179

豊かな老後を楽しむために 181

お金の使い方を知れば豊かに暮らせる 181

良質なサービスにはお金を払う 185

信頼できる情報は私たちの生活を守ってくれる 187

アメリカの資産家を見習う 190

死ぬまで夢を持っていれば人生に悔いなし 192

夢の必要性 192

もう一度、自分の夢を探してみる 194

夢を実現する時間は十分ある 195

〔附〕老後を生き残るための戦略チェック・リスト 197

あとがき 203

インターネット・ホームページお勧めサイト 205

参考文献及びお勧めの本 207

第一章 恐怖の老後がやってくる

団塊世代は老後を生き延びることができるのか

絶望の老後

日本の高度成長を支えてきたサラリーマンの多くは、国家財政の悪化と、少子高齢化がもたらす生産性の低下によって、絶望の老後を生きなければならぬ。

団塊の世代は定年後も元気で働ける。少子高齢化の労働力不足を七〇歳になるまでは補うことができるだろう。

しかし、二〇年後、私たち団塊世代が働けなくなったとき、日本に恐怖の老人社会が出現する。

道路のあちこちに行き倒れの老人が死臭を放ち、家はあっても体力がない老人たちは外に出ることもできず、ゴミと糞尿の山の中でぼうぜんと死ぬのを待つことになるのだ。

「そんなばかなことが……」と思うかもしれないが、年をとって体力が衰えたとき、だれが私たちの世話をしてくれるか考えてみるといい。

買い物に行けなくなったとき、だれが食べ物を運んでくれるのか、病気になったとき、

だれが病院に連れていってくれるだろうか。

老人ホームにさえ入れてもらえない

私たちの子供が面倒を見てくれるだろうと期待するのはやめたほうがいい。彼らにそんな余裕はない。自分たちの生活を維持するのが精一杯だ。

国や市町村がなんとかしてくれる、などと考えるのも非現実的だ。今でさえ赤字財政にあえぎ危機感もコスト感覚も希薄な公務員や行政機関に、福祉の充実など望むべくもない。子供や若い人たちが当てにできない、行政も頼みにできないとすれば、年をとった私たちが生き延びるにはどうすればいいのだろうか。いよいよになれば老人ホームのお世話になるしかないなどと、安易なことは考えないことだ。

二〇〇一年度の介護認定者はおよそ三〇〇万人、これに対して介護保険施設のベッド数は約六五万程度なのだ。つまり、現在でさえ五人に四人が施設に入りたくても入れない状況にある。将来の老人の数を考えれば、老人ホームなどあつてないようなものだ。

大金を払って有料老人ホームに入れる人はいいが、ほとんどの人は公営の老人ホームに空きが出るのを死ぬまで延々と待つことになる。

生き残れるのは自給自足できる者だけ

私は地方都市のサラリーマンだが、職場には農家の長男もいる。日曜日や五月の連休を利用して田植えをし、夏の休暇は稲刈りだ。この人たちにサラリーマン専業者は、絶対にかなわない。どんな時代になっても、たとえ日本の経済が破綻しても、自給自足ができる連中は生き残る。

だが、都市周辺に建売住宅を買って便利な生活を楽しんでいるサラリーマンの老後は、だれの助けも借りずに、自分で自分の面倒を見るしかないと覚悟すべきだ。その覚悟がなければ、生き延びることはできない。

生活資金はいくらあればいいのか、体が動かなくなったり、ボケが出たりしたときにどうすればいいのか、今のうちに準備しておかなければいけないことが山ほどある。

八五歳までがんばるとして、残された時間はおよそ三〇年。この三〇年を前向きに楽しく暮らすのか、それとも、いい知れぬ絶望の長い長い三〇年にするのか、それは、私たちが自身が決めなくてはならない。

これからの日本は今までの穏やかな社会ではない

子供の頃から頭数が多いというだけで、競争、競争と追いたられてきた団塊の世代も定年を間近にして、やっと、ゆったりした生活ができそうだと思いはじめている。

小さいながらも自分の家がある。子供たちにもそれなりの教育を受けさせて社会に送り出した。年金をもらえるのは少し遅くなるようだが、仕事を辞めたら夫婦で旅行に行ったり、好きな趣味でも見つけてのんびりした生活を楽しむことはできそうだ。まだまだ体力には自信がある、いい条件であれば退職してからしばらく働いてもいい。夫婦二人、贅沢はできないが、なんとか暮らしていけるだろう。

平均的な団塊世代が思い描く将来の漠然とした生活設計はこんなところだ。

ところが、世の中では景気が低迷し、政治家や経済学者のセンセイたちが大騒ぎをしている。リストラで苦しい毎日を送っているかわいそうな人たちもいるらしい。なんとなく不安な気持ちにならないでもない。でも、心配はなさそうだ。隣近所を見ても、けっこう余裕のある生活をしている。世の中は学者センセイや経済評論家が騒ぐほど深刻な状況ではない。

そんなにクヨクヨしなくても、定年まで無事勤めることができれば、まあなんとかなり

そうだ。

そう考えたいところだが、それは大間違いである。これからの日本は今までの穏やかな社会とはまったく違うからだ。

私たちは知らないうちに数千万円の借金を背負っている

政府は今、本気で構造改革に取り組もうとしている。国民に痛みを我慢しろといっている。これは不良債権に苦しんでいる銀行を救うためではない。このままでは日本の国が破綻するから、目の色を変えているのだ。

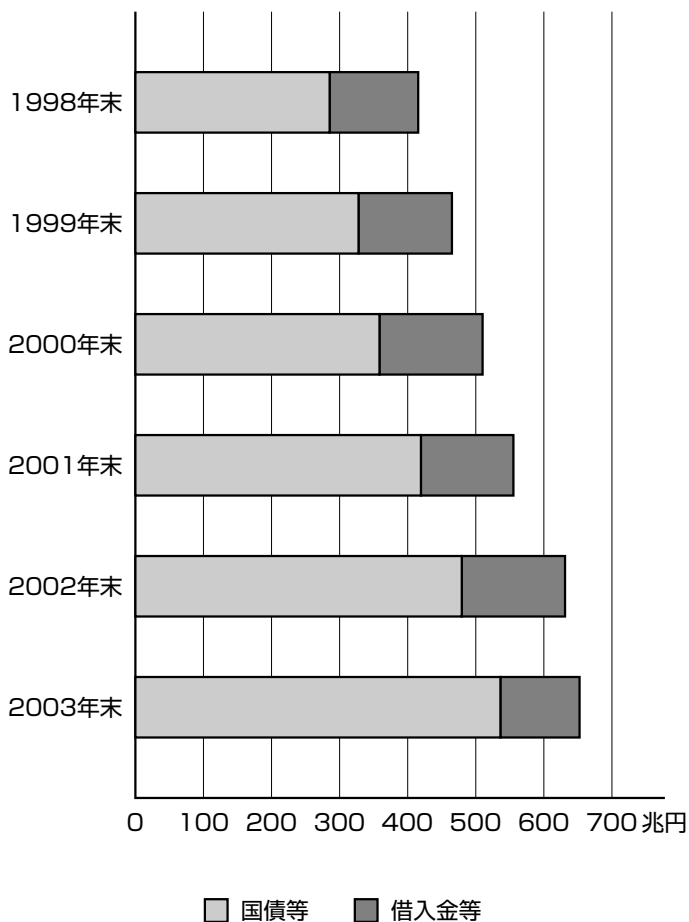
中年オジサンの平和ボケした感覚で将来を考えていたら、夫婦二人でなんとか暮らせるどころか、早々に社会から抹殺されてしまうことになる。

日本の高度成長を支えるために、私たち団塊世代も必死で働いた。家族のためにあらゆる競争を勝ち抜いてきた。これからは、今までの努力を認めてもらって、やすらかな人生をおくる権利がある——などと考えているようでは、私たちに将来はない。

なぜなら、私たちは知らないうちに膨大な借金を抱えているからだ。次ページの図1を見ていただければわかるように、国の借金は増え続けている。これを国民一人当たりの借金

図1—国債及び国の借入金

財務省理財局2004年



に換算すれば六〇〇万円から七〇〇万円にもなる。四人家族なら二四〇〇万円から二八〇〇万円だ。

私たちが「俺は借金などしていない」と泣こうがわめこうが、確実に借金取りはやってくる。

郵便貯金や銀行の定期預金は、そのほとんどを借金の返済に取り上げられて、二度と私たちのところに戻ってくることはない。

借金をしたのは政府だが、バブル崩壊後の景気を下支えし、高い生活環境を維持するためにそれを使いこんだのは私たち国民なのだ。

では、どんなかたちで恐ろしい借金取りはやってくるのだろうか。そして、借金取りからうまく逃げる方法はあるのだろうか。

借金取りの実態は後に述べるが、それを知っている人と知らない人では天国と地獄の差がある。

天寿をまっとうするまで生き残れるかどうかの、最後の戦いが始まるようとしている。

世界の歴史にも例がない異常事態

国際的に高齢化社会といわれるのは六五歳以上の人口が七%を超えたときだが、一四%を超えると、こんどは高齢社会と呼ばれる。

日本が高齢化社会になったのは今からおよそ三〇年前の一九七〇年のことだ。

そして、高齢社会に突入したのは一九九四年だ。フランスやイギリスなどの高齢化に比べても、その速さは異常である。

二〇〇二年九月の「敬老の日」に総務省が発表した七五歳以上の高齢者の数が、ついに一〇〇〇万人を突破した。およそ一三人に一人が七五歳以上の老人になった。

六五歳以上の高齢者人口比率は一七・三%（二〇〇〇年）、世界でも高齢化の進んでいるスウェーデンの一七・四%やドイツの一六・四%に肩を並べる最高水準だ（図2）。

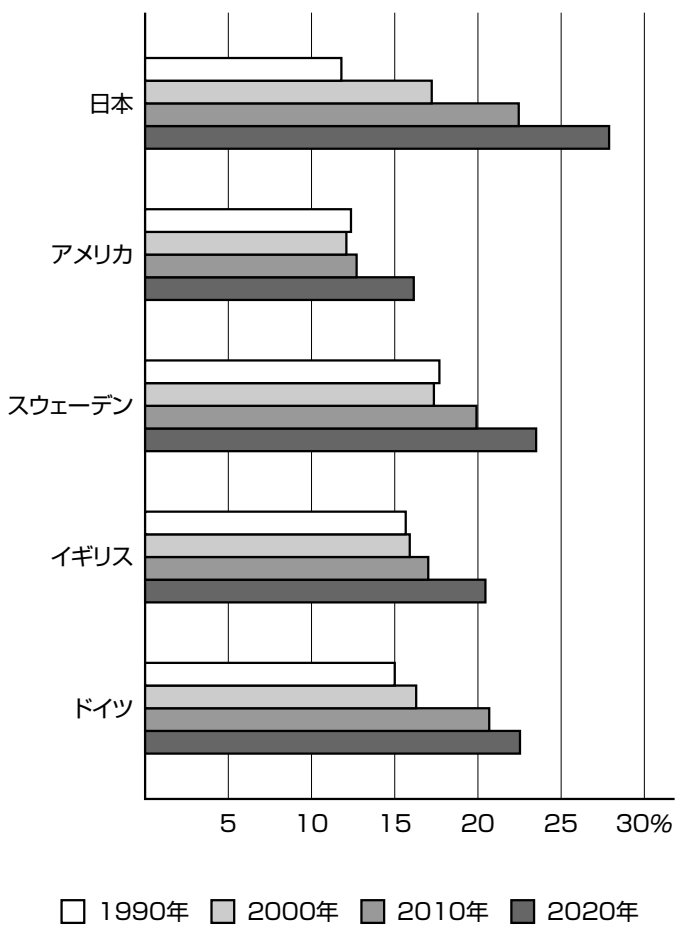
ところが、日本の高齢化はまだ序の口なのだ。

団塊世代が八〇歳近くなる二〇二〇年の高齢化率は、総務省の推計で二六%に達する。国民の四人に一人がじいさんやばあさんなのだ。

そんな世の中がどんな状態か想像もできないだろうが、これは世界の歴史に類を見ない異常事態だというしかない。

図2—主要国の65歳以上人口の割合

国立社会保障・人口問題研究所
2003年9月



お役所は頼りにならない

日本経済が右肩上がりの成長を続けていた頃は、お役所が持っているお金に群がる業界や利権団体が共同戦線を張って、公共事業で儲けまくった。地方の土建屋さんが「役所の土木工事は半分が儲けだったこともあったよ」と言うほどだった。

東京オリンピック・万国博覧会などの大きなイベントや、所得倍増・日本列島改造などと称して、高速道路を延ばし、空港や港をつくり、ついでに道路ともいえないような農村の田んぼ道まで黒いアスファルトを塗りたくり、立派な庁舎や市民会館、文化会館といった、いわゆる箱物を各市町村単位、地区単位でやたらつくりまくったのだ。

将来の展望もないその場限りのご都合行政だから、今になってそのほころびが目立ちはじめた。

バブルが破裂して大盤振舞のできなくなった政府は、景気刺激策といっては莫大な赤字を覚悟で予算編成をする。その赤字をどこで埋めるのかといえば、国債という国の借用証書を乱発して銀行や生命保険会社などの金融機関にばらまいているのだ。

最近、銀行や郵便局で、一万円から買える個人向けの国債まで売りはじめた。戦後ただの紙切れになった戦時国債を連想して私は背筋が寒くなる。

銀行や保険会社にあるお金は、我々が苦勞して貯金したり保険料を払ったりした虎の子である。それが国の借用証書に化けているのだ。

国や地方の借金をすべて集めると一〇〇〇兆円にもなるという。

現在、国の税収は年間五〇兆円強、歳出がおよそ八五兆円だ。単純に計算すれば、年収五〇〇万円のサラリーマンが毎年八五〇万円の生活をし、一億円の借金を抱えている計算だ。それは減るところか毎年新しい借金が増えている。

サラリーマンだったら、街の高利貸しも呆れて相手にしてくれないだろう。個人経営の社長なら夜逃げか首吊りだ。

日本が高齡社会になることは数十年前からわかっていたはずなのに、今頃になって「年金資金が足りない」とか、「バリアフリーなどの必要な道路整備が遅れている」とかいつて騒いでいる。

そんなお役所の体質が簡単に改まるとは思えない。老後の生活をお役所頼みにすることだけは絶対にやめるべきだ。

若い人たちの不満が治安の悪化をまねく

科学や医学の発達によって平均寿命がますます延びるようなことでもなれば、もはやパニックといつていいほどの社会的混乱が起きる。

巷にはまだまだ元気いっぱいの子いさんばあさんが、シルバーシートの数が少ないの、もつとバリアフリーにしてくれのと、それはうるさいことだろう。

一方、若い者にしてみれば、年寄りを養うために高い税金を払わされ、自分たちの生活を犠牲にしているにもかかわらず、言いたい放題言われたのではたまらない。生産能力もなく、年金が頼りのやっかい者にそこいら中をヨタヨタされたのでは鬱陶しいばかりだ。

医療費や老人福祉にかかる費用を老人が自分たちで負担すべきだ、と若い人たちが言い始めるのは目に見えている。

治安も悪化する。街の中には、働いても働いてもみんな老人たちが食いつぶしてしまうと不満を持った若い人たちが、年寄りと見れば憎悪の目を向け、血の気の多い一部の連中は引ったくりや強盗に変身して、おちおち買い物や散歩さえできなくなる。

長生きをすればするほど悲惨な生活が待っている

それに、長生きをしたために発生するリスクも考えておかなければならない。長生きのリスクは、私たちが何歳まで生きるのかわからないところにある。

平均年齢から推定して八〇歳ぐらいにはお迎えがくるだろうと考えて老後の資金を用意していたつもりが、九〇歳まで長生きをしてしまうと、一〇年分の生活費が足りなくなってしまうからだ。

病気になっても、介護が必要になっても、病院に行けず家事の援助も頼めない。唯一の財産である古ぼけた自分のうちで、じっと死ぬのを待つだけだ。

ボケてなにもわからなくなっていれば幸いだが、ベッドに縛り付けられたまま、頭だけが正常に機能しているとしたら、地獄以外のなものでもない。

健康で、生活やお金に余裕がある人たちは別にして、一般的なサラリーマンには長生きをすればするほど悲惨な生活が待っている。

老後の面倒を見てくれるのは私たちの子供ではない

子供を甘くみるな

街の中を我が者顔で闊歩し、場所もわきまえず携帯電話でしゃべりまくり、駅や電車の中でやりたい放題の子供たちを見て、こいつらのしつけはどうなっている、親の顔が見たものだ、と思うことがある。

その、親の顔だが、考えてみれば、そう、私自身の顔であり、あなた自身の顔なのだ。うちの子に限って、などと考えるのはやめよう。私の子供もあなたの子供も、そこいらでいつも見かける無作法な若い連中と変わらないと認識するべきだろう。

子供にとって親はたんなる金づるであり、利用できるだけしたら、あとは用のない存在である。

極端な言い方かもしれないが、そのくらいに考えておいたほうが身のためだ。

私たちが育った時代には、社会的な道徳を教えてくれる学校や近所の大人たちがいた。いたずらをすれば、当然のようにゲンコがとんできた。ところが、核家族化が進み、近所

との付き合いが希薄になり、学校で教師が子供に手を上げただけで血相を変える親たちがいる時代だ。

差別をなくすという理由で学校の教育レベルを最低ラインに合わせたり、つごうが悪いことは政治家や役所のせいにする親の体質を、子供たちは鋭い感性で見破っている。

それを知らずに、「俺は家族や子供のために会社で苦勞をしているんだ」と胸を張ってみても、子供はちゃんと知っている。政治家も、役人も自分の親も、しょせんひとつ穴の貉むじなだということだ。

サラリーマンが家族のために身を粉にして会社で働いているとしても、子供が実際に目にするのは、家の中でゴロゴロしながらテレビを見て、政治家や世の中の荒唐に憤慨している建て前だけの親の姿だ。

子供たちは私たちの行動や考え方をしっかり観察している。私たちがそうであるように、子供たちも個人の自由と政治の責任を楯に、自分たちの責任から逃げ出す術を身につけている。

親の面倒を見てくれる子供は四人に一人

総務省の「世界青年意識調査」を見ると、驚くことに「どんなことをしても親を養う」と答えた日本の一八〜二四歳の青年は、一九九八年でたった二五％にすぎない。ドライで自己責任を認識しているはずのアメリカの若い連中では、六六％が本気で親の面倒を見るつもりでいる。日本とは比べものにならないくらい親孝行なのだ（図3）。

私たちも若い頃は親の面倒を当然見るべきだと思っていた。ただ、親たちにも危機感があつたのだろう。「子供の面倒にはならない」と言いはじめていた。

しかし、親も子も、そうしたいという思いだけで、結局、子供は親を兄弟でたらい回しにし、親はなすすべもなく子供に寄りかかってしまう姿を、しかたがないとあきらめていく。

日本の若者は四人に一人が最後まで親の面倒を見ると考えているが、現実には親の面倒を見ることになったとき、果たして何人が実行してくれるだろうか。

子供たちに期待する気持ちはどこかに潜んでいるとしたら、その期待は確実に裏切られることになる。

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

熊本 秀樹 (くまもと ひでき)

1948年 山口県生まれ

1970年 千葉工業大学卒業

35年間サラリーマン一筋

1999年 ファイナンシャル・プランナー資格取得

千葉県木更津市在住

団塊世代生き残り戦略

2005年 4月15日 電子出版発行

著 者 熊本 秀樹

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Kumamoto Hideki 2005 Corded in Japan

ISBN4-8355-8719-7

(文芸社発行の通常書籍(紙の本)については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」
サイト、<http://www.bungeisha.co.jp>を御参照ください。)

新 05.04.05 Hicom